

ルクリュの19世紀世界地理

第1期セレクション1 東アジア

エリゼ・ルクリュ著，柴田匡平訳（古今書院，2015年1月発行，2万円＋税）

Book Review

Elisée Reclus, translated by Kyohei Shibata : The Universal Geography : The Earth and its inhabitants East Asia : Chinese Empire, Korea and Japan

今津 敏晃*

IMAZU, Toshiaki

本書はエリゼ・ルクリュ（1830-1905）が執筆した『新世界地理』全19巻の第7巻の邦訳である。原著の刊行は1882年，日本では明治15年にあたる。ルクリュはフランスの地理学者であると同時にアナキストであった。パリ・コミューンの闘争に参加して入獄され，国外追放に遭っている。その後，スイスに亡命し，クロボトキンらとアナキスト運動を展開するかたわら，地理学の著作を発表し続けた人物である。彼の詳細については本書の「訳者あとがき」や近年刊行された，エリゼ・ルクリュ，石川三四郎『アナキスト地人論 エリゼ・ルクリュの思想と生涯』（書肆心水，2013年）などに詳しい。

本書の構成は次の通りである。

- 第1章 総説
- 第2章 チベット
- 第3章 中国トルキスタン[東トルキスタン]—タリム盆地
- 第4章 モンゴル
- 第5章 中国

*本学法学部准教授

第6章 朝鮮

第7章 日本

総説を除く各章では，自然や住民，産業や行政区分などの地誌的情報がそれぞれ節を分けて解説されている。そこで取り上げられる項目は章ごとに異同はあるものの，自然条件から政治，社会，文化，風俗状況まで幅広く論じられており，ルクリュの知識の該博さに驚かされる。添付された豊富な地図や挿絵は記述をヴィジュアル的に理解する助けとなっている。

総じて，本書の記述からは最新の知見を網羅することで過去から現在に至る世界の姿を描こうとしているということが伝わってくる。

その一方，この時期の東アジアを描写したという点で本書は貴重な同時代分析ともなっている。なぜなら1840年のアヘン戦争から始まる約半世紀の間，東アジアはめまぐるしく変動したからである。日本を例にとっても次の通りである。

1853年 ペリー浦賀来航
1868年 戊辰戦争
1877年 西南戦争
1889年 大日本帝国憲法発布
1894年 日清戦争

ルクリュが描こうとした時期の日本は幕末維新、そして近代化という変化の只中の日本だったので。

それはルクリュが描いた事象が本書の執筆時にはすでに失われてしまった、もしくは失われつつあったということでもあった。

たとえば、アイヌ人に関する記述はその一例といえる。ルクリュはアイヌの身体的特徴や習俗などを詳細に記しているが、当時のアイヌはその存在が脅かされている状況であった。明治日本は19世紀後半の北海道開拓とそれに伴う同化政策の過程でアイヌ人の習俗を禁止し、土地を奪い、移住、営農を強要した。ルクリュは「部族民としての存在を脅かすのは文明で、今なお保持する自由を間もなく喪うと気付けば、アイヌ人はほとんど生に執着しない」(715頁)と簡潔に述べているが、そこにはアイヌ人を否応なく押し流す近代化、国民国家への同化の暴力的な側面が意識されている。

このようなことは記述の長期的な正確さという点では不利に働くが、一方で、本書に歴史的記録としての価値をもたらすことにもなった。現代において本書が読まれるべき理由といえる。

他方、内容構成上の特徴として、自然条件や文化的条件などの地理学的アプローチと、現代では地政学として論じられることの多い、国際政治的状况が分離せずに論じられていることが挙げられる。これは地政学が地理学から分離する以前の時期に刊行されたため当然といえば当然だが、当時の知識人の地理を考える際の視角が窺え、興味深い。

余談ながら、随所に見られる地政学的視点に基づく記述は、全体として東アジアにおけるロシア

の勢力増大およびその影響を強調するものとなっている。第1章「総説」内で「ロシアの南進」という項目が設けられているところにもそれははっきりと見てとれる。本書刊行当時の東アジア情勢を少しでもかじったことのある人間ならば、次の記述の歴史的状況は直観できるだろう。

外交上のささいな悶着が突発し、ロシアが中国沿岸で軍事演習による国威を見せようとするなら、適当な朝鮮沿岸の港を奪取し、ウラジオストクよりもさらに強力な軍事基地を設けるのに、何の苦労もないだろう。そこを根城に遊戈すれば、黄海の入り口と、揚子江河口、そして日本列島の諸海峡を支配できるのである。ロシア財政は破綻し、大衆はどん底の貧困にあえぐ生活で、いくつかの州は定期的な食料不足や飢饉のもとにあるが、同国の資源は強大な攻撃力の充実に振り向けられている。首都から八〇〇〇キロの距離にあっても、その軍事力は日中両国の自領および自国海域での軍事力をしのぐ。国土防衛のいろいろな支度や、鋼鉄製の大型の大砲をそなえた砦や、防柵にもかかわらず、おそらく北京はかつて英仏に対したときと同様に、ロシアのなすがままになるだろう(11頁)。

清、朝鮮、日本の3国は、西洋列強の東アジア進出への対応から、国内外がさまざまな変動に見舞われていた。日本は朝鮮半島がロシアの影響下におかれることを国家存立の危機としてとらえ、国力、軍備の増強に努め、朝鮮政府との提携や、朝鮮への介入による朝鮮半島の中立化を模索した。山縣有朋首相による利益線演説や、日本人軍事顧問による朝鮮軍の訓練(644頁に記述あり)などはその事例として知られる。この延長に日清戦争が勃発し、その後、朝鮮半島をめぐる日本とロシアは直接対峙することになった。

こうした緊迫した国際情勢と地理学的知見が当然のように接合されているのが本書の記述の特徴である。日本について例を挙げれば、第7章第4節「住民」内「切腹と名誉」(727～728頁)の次の記述を指摘することができる。

近代の戦乱や革命も、日本人が祖先の勇気を損じていない証拠である。もしもロシアなり、何らかの西洋国家なりが日本と紛争に至れば、恐るべき敵を相手をするようになるのは間違いない、現在までのところ、ヨーロッパの軍隊は外国人種に対しほぼ常に容易に勝利してきたが、それは規律と、武器の面での優越性のおかげである。だが日本民族は、戦わずして征服されることは絶対のない国民のひとつだ。彼らの文明は、四千万人が屈辱的

な隷属状態を嘆くに留まるようなものでは金輪際ないのである(728頁)。

ここでは日本人の歴史的文化的心性が、日本人の国際情勢への対応を規定していると述べられている。議論の飛躍を承知で述べれば、ここで指摘されていることは太平洋戦争や敗戦後の日本の復興なども視野に含むことのできる射程の長い指摘といえるだろう。地理学的、文化人類学的な知見を基盤とした分析が長期的な分析を支えているといえるかもしれない。

以上、見てきたように本書は同時代的にも、歴史史料としても、また、より長い射程においてもさまざまな知見を現代の我々に与えてくれる。本書および本シリーズが多くの人々の目に触れることを望む。